

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第32回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

所に就きて思を發せる(巻第七 二二六九番歌)

巻向の山べとよみて行く水の

水沫のごとし世の人吾は

柿本朝臣麻呂の歌集に出でたり

テレビのスクリーンの中、リズムよく腕を振り、鍛え抜かれた体がしなやかに街の通りを駆け抜けていく。土曜日の午後、何とはなしに見始めたマラソンのレースからなぜか目が離せない。その人はただ走っているだけなのに、もう長いことその姿を見守っている。今、何を考えながら走っているのだろう。どうしてこんなにも長い距離を走りたいと思うのだろう。後ろから追ってくる人の足音や息づかいが聞こえているのだろうか。「折り返し地点が近づいてきました。相変わらず快調にとばしています。」アナウンサーの力強い声が耳に残る。先頭集団がコーナーをまわる。優勝候補の選手は余裕で、無名の若い選手は必死に、そしてベテラン選手が険しい表情でそこを通り過ぎていった。

「折り返し地点」。人生の喩えにすりかえれば、それは必ずしも半分を意味しない。突っ走ってきて、ふと自分を振り返るようなとき。自分の思い描いていた夢がある程度叶ったとき、叶ったのに空っぽの自分を感じたときなのか。今まで自分は何をしてきたのだろう。何のためにやっているのだろう。このまま、走り続けていいのだろうか。しなければならぬこと、守らなければならないもの、けれど本当にしたいことが別にあったような気持ちがある。み上げてきて止まらない。得たものと失ったもの、自分自身についてもう一度落ち着いて考えたいときがどの人にもやってくるのかもしれない。

柿本人麻呂は、宮廷歌人であった。個人としての感慨を歌うというよりは、宮廷に仕えている者として美しい川や山につけては、新しい都の誕生を祝い、誉め讃え、この安泰した時代が続くようにと祈りを込めて歌を作る。また、皇子が逝去されれば、宮廷全体の哀悼の意を言葉に込めて長歌を詠み霊前に

捧げる。言葉が魂と強い力をもっていると信じられた時代に、栄枯盛衰のすぐ隣にいて歌で人々の心を慰め、その時代を盛り立ててきた。むろん個人においてもまた、職務のために妻をおいて遠く旅に出て恋の歌を詠むことや、最愛の妻を亡くし泣血哀慟して歌を詠んだこともあった。山をざわめかせる風の乱れに、波の揺らす玉藻の寄り添う姿に妻を求め、情熱を美しく激しく吹き出させてさらなる言葉の力を生み出した。「とよみて行く水」とは、「響む」で、鳴り響きとどろいていく水の流れを意味している。「巻向山のほとりをとどろかせて流れていく水の、あぶくのようなものだ。この世に生きる人であるわれは。」変わらないものなど何もない。留まっていたくても激しい流れには逆らえない。長いようでも、百年と続きはしないはかないこの命なのだ。どんな感慨で人麻呂は、この歌を詠んだのであろう。想像は広がる。そして、平成の今もこの歌に詠まれるような人の言みは変わらない。

いよいよ競技場に選手が戻ってきた。優勝候補といわれた人の姿は見えない。ゴールを最初に駆け抜けた若者は、自分が成し遂げた快挙に興奮していた。しばらくしてベテラン選手が静かにゴールした。自分で腕時計を確認し、タオルで汗を拭い、荷物のところへといつものように戻っていた。走り終えたあとのさわやかな顔は、このレースが充実したものであったことを物語っていた。いつの世も人は、水沫のごとき人生を幾度となく折り返し、幾度となく揺れながら流れていく。



奈良県桜井市巻向川のほとりにて